慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン・シモン主義に関する研究ノート（一）
Sub Title	A note on the Saint-Simonianism
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.2 (1961. 2) ,p.132(56)- 140(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19610201-0056
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610201-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

サン・シモン主義に関する研究ノート（一）

野地洋行

一、問題提起。
二、サン・シモニアンと科学的社会主義を結ぶもの。
三、サン・シモニアンと階級闘争。

一、問題提起

一九五八年、Georg G. Iggers により、サン・シモニアンに関する二つの文献が出された。一つはサン・シモニアンの中心的思想体系を代表すると目されている「サン・シモンの学説解義、第一年度、一八二九年」[1]の英訳とその解説であり、他は「権力礼讃」[2]（The Cult of Authority）と題される研究書である。

これらの研究は、学術書としてみれば多くの個別的な成果をふくんでいるのだが、何よりもまずその問題の提起のしかたが、私には極めて問題をはらんでいるように思われる。その問題意識はこの著者だけにかぎらず、たとえば、ハイエク[3]などにも早くから同じ形で強烈に現われている。つまり、この「権力礼讃」とか、「理性の濫用」（ハイエク）などという主題からもただちに推察されるであろうが、彼らは、サン・シモニアンを全体主義の思想的先駆者と考えるのである。今まで、普通サン・シモンおよびサン・シモニアンは、科学的社会主義に先立つところの、空想的社会主義として考えられてきた。したがって、サン・シモニアンに関する研究は、ことに、社会学の分野でのコントの実証主義との関連を別にすれば、[4]社会主義の先駆者という視角から考察され、研究されてきた、といえよう。むしろリスト[5]その他が主張するように、サン・シモンが近世社会主義の先駆者とみなされることができたのは、彼の弟子達たるサン・シモニアンの運動を通じてであり、そう理解するのが一般的「通説」[6]であるとするならば、この視角はますます正当なものとなろう。それを反映するように、日本でも、サン・シモニズムの研究がくりかえされる場合、そこでの問題意識はせいぜい、サン・シモニズムを体系的・「組織的に検討し、これによってその思想的特質を見出すこと」[7]であるか、あるいは、空想的社会主義の「空想性」を再評価し、「なんらかの現代的意義」[8]を認めようとするにとどまるのである。この点では「普通には、サン・シモン派の思想は空想的なものにして、同時代においても、またその後の時代においても、格別影響するところなきものの如く考えられていたが、しかし、詳しく研究してみると決してそうではないので、種々の方面において甚だ重大なる影響を及ぼしていることが発見されたのである」[9]という、大正十二年の米田庄太郎博士の問題意識から余り発展していないように思われる。もちろん、マルクスやエンゲルスが空想的というのは、根も葉もないとか、幼稚だという意味ではないのであって、「共産党宣言」や「空想から科学へ」の中で明瞭に述べられているように「(1)すでに社会主義社会のヴィジョンをもちながらも、その実現をになう主体――労働者階級――を見いだすことができず、したがって実現のための具体的方策・手段を提示することができず、ただひとびとの理性と心情とに訴えるだけにとどまらねばならなかったこと。(2)それと関連することであるが、社会を自然との類比においてとらえ、自然科学的方法をそのまま社会に適用するだけにとどまったことを意味する」[10]。

つまり、サン・シモニアンの研究は、ほとんど、マルクスに集約される近代社会主義の先駆者という観点から漠然ととりあげられてきたのである。ことに日本ではそうである。だが、問題意識の点では社会主義の反対者の方が進んでいるようである。ハイエクを先頭として、彼らはサン・シモニアンを近代全体主義の先駆者としてとりあげる。この場合、社会主義はファシズムとともに一括して「全体主義」として把握されてしまう。ソヴィエトも、ナチもすべて「近代全体主義」[11]であり、サン・シモニアンはその思想的先駆とみなされる。こういう観点はいうまでもなく一種の抽象化であり、誤りであるけれども、こういう観点に立つかぎり、サン・シモニアンの「現代的意義」を再評価することは、とりもなおさずその全体主義・権威主義の現代的意義を「再評価」することになり、社会主義の全体主義的性格を強調することになるのは明らかである。

ここで社会主義と全体主義・あるいはマルクジズムとナチズムの相違を愚かしくも証明するつもりはまったくない。だが、サン・シモニアンばかりでなく、その師サン・シモン自身にまで近代全体主義の源流をみ出す考え方が、社会主義者の側にも――たとえばガロディ[12]――あるとすれば、次のマルクスとサン・シモンの言葉を明示することによって、サン・シモンとマルクスの根本的つながりがどこにあるかを確認するのは無駄ではないだろう。

「階級と階級対立とをともなう旧ブルジョア社会にかわって、各人の自由な発展が、万人の自由な発展の条件となるような一つの協同社会があらわれる」（マルクス）[13]。「私の全生涯はただ一つの思想に要約される。すなわち、すべての人々に、その才能のもっとも自由な発展を可能ならしめること」（サン・シモン）[14]。

マルクスによって形成された近代の社会主義の特色は、何よりもまず、それが個人の確立・自我の自由な発展を内包するものであ

る。この点においてそれは全体主義と決定的に対立する。全体主義は一義的に個人の否定であるが、社会主義は「個人の自由な発展」をその具体的内容とする。この点に関して理念的にはいかなる幻想も入る余地はない。そこで問題は、むしろ、ハイエクやイガーズ(Iggers)などの手からはなれ、われわれ自身の問題として次のように二つの点で提起されるであろう。

第一に、科学的社会主義は、疑いもなく、サン・シモンあるいはサン・シモニアンなどの空想的社会主義から極めて多くのものを享けているのであり、その意味でサン・シモニアンも社会主義の視角から検討されるべきであるが、そのさい、科学的社会主義がサン・シモニアンからうけたものは一体何なのだろうか。空想的社会主義の再評価とは、もはや漠然とそれがのちのフランス社会主義に広汎な影響を与えていることをくりかえしたり、それが単なる「空想」にとどまるものではないことを漫然と主張することではない。それは、マルクスはサン・シモン、あるいはサン・シモニアンから何を学び、何をとったかを、より具体的に研究することであろう。

第二に、個人の確立こそ近代の成果であり、近代の社会主義は、個人の自由な発展をその内容としてもっているとするならば、一体サン・シモンあるいはサン・シモニアンの空想的社会主義は、本当に全体主義であって個人を否定するものなのかどうか。サン・シモンの言葉通り、それは十八世紀啓蒙の十九世紀的延長者として、個人の自由な発展を内包するものではないのか。

あるいはもし、イガーズがいうように、サン・シモンとサン・シモニアンの間に明確な一線を画し、サン・シモニアンにこそ近代全体主義の（それゆえに社会主義の）源をみることが正しいとすれば、サン・シモンの学説はその弟子達の活動を通じて、そして通じるかぎりにおいてのみ社会主義の名に価するという、従来の「通説」はくつがえされないまでも重大な訂正をうけねばならないであろう。この点、サン・シモニアンの宗教的方面を社会経済思想と無関係なものとして無視してきた従来の研究[16]に対し、イガーズが全体主義の観点からだとしても、その宗教面をふくめた全体的・統一的解釈をこころみたのは十分意味があることだと考えられる。

二、サン・シモニアンと科学的社会主義を結ぶもの

まず最初に、前節で提起された二つの問題のうち第一の問題について考えてみよう。マルクスは空想的社会主義から何を学んだのだろうか。思想史的にいいなおしてみよう。イギリス古典派経済学、ドイツ観念論哲学、フランス社会主義のうち、フランス社会主義から何を学んだのであろうか。もちろん、それは社会主義である、という答えは容易である。だがそれでは社会主義とは一体何であろうか。ここで考えられている社会主義は、たとえばリカードォ派社会主義の全労働収益権説とは随分違ったものである。

私はこの場合、マルクスがそこから学びとったものは「社会的総労働の、社会的総欲望への合理的配分」の観念であったと考える。

この考えは周知の通り、資本論全体を通じて流れ、ことに第一巻第一篇第四節「商品の物神的性格とその秘密」の中においては明確な形で現われている。諸商品の無政府的な、自由な交換を通じて、すなわち、「価値」の成立を媒介として自然発生的に行なわれる社会的総労働時間の社会的総欲望への配分を、マルクスは商品生産社会の基本的性格とみとめる。この商品生産の社会は資本制生産の社会へと発展するにつれて深刻な矛盾を呈するようになる。まず第一に資本と労働の間の直接的対立矛盾であり、第二に、資本主義的生産の無政府性それ自身から生まれる恐慌の脅威である。そこで、生産の社会化につれて所有もまた社会化されねばならない。それが社会主義革命である。社会的生産が各自勝手な利潤追求の中で自然発生的に実現されるのではなくて、合理的に計画されるようになる。社会化は単に所有にとどまるのではなく、生産の内部にまでつきすすむのだ。社会的総労働時間は総欲望に対して合理的に、計画的に配分されねばならない。マルクスが空想的社会主義、ことにサン・シモニアンから学んだものは、この合理的配分の観念だったではないだろうか。

もちろんサン・シモニアンはこの合理的配分を、「労働時間」の配分としては把握することはできなかった。彼らにとって、資本主義的生産も、その経済学的表現であるリカードォの経済学も、まだ海峡の向うから渡ってきた外国の理論にすぎなかった。

次の言葉をみよう。「産業的事業が、望みうる完成度に達するには、次の諸条件が必要です。第一に、もろもろの手段が、各地方と各産業部門との需要に応じて配分されなければならず、第二に、それらが、もっとも有能な人々によって運用されるように、個々の能力に応じて配分されなければならず、第三、最後に、生産を組織して、いかなる部門においても、欠乏と混乱とをおそれる必要が全くないようにしなければなりません。[16]」つまり彼はそれを「生産手段と消費需要とを、よりよく合致させる[17]」こと、社会的総需要への、生産手段の合理的配分として理解したのであった。そこにも、マルクスとサン・シモニアンを区別する深い断絶がある。だが、それにもかかわらず、社会的生産の合理的計画の観念において、それは、他の空想的社会主義とともにマルクスに大きな遺産を残したと思われる。

次に彼らの誤りを衝こう。彼らはどの点でマルクスと断絶するのであろうか。彼らは社会の欠陥を、この配分の仕方が悪いからだ、と考える。社会の矛盾は、産業のメカニズムそのもの――実は資本主義的生産のメカニズム――の必然的結果だとは考えないで、それを、配分者の不適任、レセ・フェール的な配分方法の不適格さからくるのだと考える。「労働手段の配分者たちが、その職分の遂行にほとんど才能を示していない[18]」からだと考えるのである。その配分者たちとは、土地所有者と資本家とである。彼らはサン・シモニアンの目に、労働手段の保管者として映る。そして彼らの職分は「それらを勤労者に配分すること。[19]」なのである。サン・シモニアンが

提案する改革案は、これらの配分者の交代・統一である。

すなわち、財産に関しては国家がその唯一つの相続者となり、一般的銀行制度（système général de banques）がこの国家権力の具現者、実施者となり生産手段をもっとも有効かつ適切に分配し、組織化するのである。レセ・フェールの中で分裂し、勝手に競争する個々の資本家・土地所有者に代って、統一的、綜合的銀行家が生産の司令官になる。自由放任から産業社会への移行は、労働者と資本家の階級闘争の結果ではないのだから、それは本質的には単に司令官の交代・統一化でしかない。サン・シモニアンは、歴史的な事実であるところの、資本家や銀行家の産業支配を、彼らに附着させられた固有の職分とみなしたのである。「資本家は彼が産業的指導者であるが故に資本家であるのではなく、彼が資本家であるが故に産業的司令官となるのである。」[20]ということは彼らにはみえない。そこで彼らは、生産手段の配分者として不適格な個々の資本家を解職し、代りに統一的に組織された銀行家を任命する。銀行は産業的指導部の中枢機関にまつり上げられる。ここには合理的配分、または計画があるだけで、新しい社会の建設者、能動的主体としてのプロレタリアートはいない。彼らが貧困から解放されるとしても、それは階級闘争の勝利の結果ではなくして、合理的な生産組織の結果にすぎない。プロレタリアートはまだ「苦しみ、搾取される人としてばかりでなく、能動的な力[21]」としては把握されていないのである。

三、サン・シモニアンと階級闘争

ここでわれわれは従来から確立されていない問題に逢着せざるをえない。

一体、サン・シモニアンの学説は、ロレンツ・フォン・シュタインのいうように[22]、プロレタリアートの思想的表明とみることができるのだろうか、あるいはできないのだろうか。その近代社会主義への遺産は、単に生産手段、あるいはより好意的にみれば、社会的総労働の合理的な配分、ということだけなのだろうか。本当にプロレタリアートの主体性はないのだろうか。

フランスの産業革命が、丁度この「解義」（Exposition）の出版された頃、つまり一八三〇年頃から発展したのであり、したがって産業資本主義に固有の、ブルジョアジーとプロレタリアートの対立は、まだ展開されていなかったのは周知の事実である。このことはサン・シモニアンの理論に反映する。ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立が、そのようなものとして彼らに把握されなかったとしても、それは彼らの不明の故ではない。その点彼らは恕されていい。彼らが「人間による人間の搾取」について時々語る場合でも、それは「富者による貧者の搾取」であり、「怠惰な消費者による勤勉な生産者の搾取[23]」であって、資本家による労働者の、その剰余労働の、搾取の機構ではなかった。このことは、はっきりとさせておく必要がある。彼らの中心概念は、労働手段を、人々の諸需要

へいかに有効かつ合理的に配分するかという問題であった。彼らはこの配分が、その能力を全く欠いている人々、つまり出生の偶然によってたまたま所有者になっている人々によって行なわれていることを批判する。搾取とは、このような出生の特権にあぐらをかいた、根拠のない「不当な」利得のことであり、資本による、剰余労働の取得のことではない。少なくとも「解義」においてはそうである。

一つの理論がプロレタリアートの思想的表明であるといえるのは、労働力の商品化が、社会全体にかなりの程度まで浸透し、労働者が、自分を直接的に資本に対立するものとして意識するときであり、理論的には、全労働収益権説においてではないだろうか。イギリスに比べて、フランスでは、社会主義は一般的に組織・秩序の理論としてあらわれ（モレリー・マブリーをみよ）、リカードォ派社会主義のように、組織論のない権利の理論としてあらわれることが少ないようにみえる。その意味で、全労働収益権説は、ホジスキンに典型的に現われるように、自然権思想の、経済学への徹底した適用であるともいえよう。だが、フランスにおいて、全労働収益権説がイギリスのように十分な展開をみなかったことはうなずける。つまり、産業革命がはじまったばかりで、まだ、剰余価値の帰属をめぐっての労資の根本的対立を経験していないフランスでは、リカードォ理論に内在する矛盾、すなわち、商品の価値は投下労働量によってきまるのに、労働者は、彼が生産した価値のほんの一部分しか賃金としてうけとっていないという矛盾を、理論的に切実な、つきつめた問題として意識することはできなかったのであろう。アントン・メンガーは次のようにいう。「イギリス社会主義者の著書に屢々あるような、全労働収益権の明確なる承認は、私の知る限りでは、この講演（「解義」――引用者）中に表われておらぬけれども、しかし全労働収益権はサン・シモニストの有名なる根本則、すなわち正当なる社会状態においては、各人は能力に応じて用いられ、給付に応じて報酬を受くべきである、という命題の内に胚胎している。[24]」しかし、これを全労働収益権というのは、マルクスの剰余労働価値説を全労働収益権論というのと同様誤りであろう。

サン・シモニアンとマルクスを距てる要因、そこに介在するものの一つは、全労働収益権論ではないだろうか。もちろん、このことはメンガーとともに、マルクスをこの学派の一人に数えることではない。要約しよう。サン・シモニアンには組織の理論、合理的配分の思想はあったが、資本と労働の搾取関係、直接的対立についての、経済学的認識が全く欠けていた。それを補充したのがリカードォ派社会主義を中心とする、全労働収益権説だったのではなかろうか。逆にいえば、「社会的総労働の合理的配分」をその中心観念とするフランス空想的社会主義は、リカードォ派社会主義の理論を媒介することなしには、科学的社会主義に到達しえなかったといえるであろう。かくして、サン・シモニアンの理論は、結果として、あるいは事実として、労働者の解放を含みうるとしても、それは資本

主義的生産における労資の固有な対立ぬきの社会主義であり、合理的配分論であり、その限り、プロレタリアートの思想的表明であるということができないと私は考える。

このようにみてくると、サン・シモニアンの思想的特質として次のようにいわれるのは明白に誤りであろう。「第二に、彼らは、資本主義社会における基本的対立を、生産手段の所有者とこれを所有しない労働者との間の利害関係の対立、すなわち、社会的利益と個人的利益との対立、として明確に把握した。[26]」

何よりもまず、生産手段の所有者と、労働者の間の利害対立は、社会的利益と個人的利益との対立とは、「すなわち」という言葉によって、簡単に等置できない性質のものだからである。つまり、労資の階級闘争は、レセ・フェールの害悪——彼はそれを主として恐慌においてみる——とイーコールには置かれないからである。労資の階級闘争も、レセ・フェールの結果だと答えることによっては、この問題は解決されない。なぜなら、この二つの問題はむしろ思想史的にいえば、唯物史観と、古典的自由主義の間の問題だからである。あるいは、マルクシズムと自然法思想の間の問題だからである。サン・シモニアンの理論は、私には丁度自然法思想からマルクシズムへの道の中間に位置するもののように思える。その思想史的位置は以下の研究によって更に確立されるであろう。

ともかく、「解義」には、労資の階級対立の意識は明確ではなかった。マルクスも認めるように「サン・シモンにあっては——サン・シモン学派にあっては、一貫してそうであるが——travailleur（労働者）は労働者を意味しないで、産業的および商業的資本家を意味する。[26]」彼らが時々、資本家と労働者の階級対立についてふれることがあるとしても、それは、レセ・フェールの弊害のかげにかくれるか、あるいはそれに包含されてしまい、影がうすくなっている。この点に関しては「権力礼讃」の著者もまったく一致する。「サン・シモニアンは労働者階級への彼らの同情を強調したとしても、彼らはレセ・フェール経済の基本的な危機的性格を、階級闘争や、搾取にではなく、組織の欠如に、したがって、共同的利益に対する個人利益の優位にみるのである。[27]」

（注1） The doctrine of Saint-Simon: An Exposition. first year, 1828—1829. Translated with notes and an introduction by Georg G. Iggers. Boston, 1958. この序説は以下 introduction と略称する。

（注2） Georg G. Iggers; The cult of authority, The political philosophy of the Saint-Simonians. a chapter in the intellectual history of totalitarianism, Hague, 1958.

（注3） Hayek; The counter-revolution of science: Studies on the abuse of reason, Glencoe, Illinois, 1925.

（注4） ハイエクは実証主義も社会主義も、すべて反動的かつ権力主義的運動としてはじまっている、とさえいっている。Hayek; ibid., p. 123.

（注5） Gide et Rist; Histoire des doctrine économiques, 1913, pp. 237-8. 宮川訳上巻二八六頁。

（注6） 水田洋「社会主義思想史」一八九頁。

（注7） 坂本慶一「サン・シモン派の社会経済思想」（人文学報第七号、京都大学人文科学研究所、一九五七年、所収）二一頁。

なお坂本氏のこの研究は、水田洋氏によれば「サン・シモン派についての、日本におけるほとんど唯一の研究」（水田洋、前掲書一九〇頁、注1）といわれるが、たしかにこの研究はサン・シモン派の思想を体系的・組織的に把握することには見事に成功しているのだが、そこでの問題意識という点では別に新しいものはみられず、したがってそこで結論としてえられた「思想的特質」も、のちに論ずるように、別に新しいものではないばかりか、かなり問題点をふくんでいる。

（注8） 坂本慶一、前掲論文、四五頁。

（注9） 米田庄太郎「サン・シモン派の社会改造哲学と連帯思想」(一)(二)(三)(四)(五)（経済論叢、京都大学、所収。第十六巻三—六号、第十七巻四号、大正十二年。）引用個所は(五)第十七巻四号、四八三頁。引用は現代かなづかいになおした。

（注10） この要約は、城塚登「近代社会思想史」二六五頁を利用させていただいた。なお、Manifest や Entwicklung の当該個所の指摘は省略する。

（注11） Iggers: The cult of authority, 1958, p. 194

（注12） 「このサン・シモンの夢想のなかから、後世のブルジョアジーはたえず、労働者階級に対抗する武器、すなわち、アメリカの〈技術者支配（テクノクラシー）〉をはじめとして経済の〈総統〉のヒットラー的秩序にいたるまでの武器をつくりだす。

Roger Garaudy; Les sources française du socialisme scientifique, 1949. なお一九四八年版にはこの注は入っていない。平田訳一四五—六頁。

（注13） Marx. Engels; Manifest der kommunistischen Partei, 1848, Dietz Verlag Berlin, 1958, S. 35.

（注14） 私はサン・シモンのこの言葉を、はじめ Karl Vorländer; Geschichte der Sozialistischen Ideen, 1924. S. 85 でみ出したが、フォルレンダーもこれを Charléty; Histoire du Saint-Simonisme (1825-1864), 1896. 1931 ed., p. 23. からとったのであろう。なお、このシャルレティの著作は、同年に出た G. Weil; L'école Saint-Simonienne, son histoire son influence jusqu'a nos jour, 1896. とともにサン・シモニアンに関する基礎文献である。）

（注15） たとえば Hayek; ibid., p. 152.

（注16） Doctrine de Saint-Simon. Exposition. 1re année, 1828-1829. Paris, 1831, p. 191.

古賀訳（邦訳は第七回が部分的に訳出されたものである）河出

書房新社、世界大思想全集、10、二三五頁。Iggers; Translation, p. 95.

（注17） Doctrine, p. 205. Iggers; Translation, 106. 古賀訳二四四頁。

（注18） Doctrine, p. 190. Iggers; Translation, p. 95. 古賀訳二三五頁。

（注19） Doctrine, p. 190. Iggers; Translation, p. 94. 古賀訳二三五頁。

（注20） K. Marx; Das Kapital, (M-E-L-Institute) Bd. I, S. 348. 長谷部訳五五七頁。

（注21） Izlozhenie ucheniya Sen-Simona, translated by M. E. Landau, Moscow, 1947. Introduction by V.P. Volgin, cited by Iggers, Introduction, xlvi.

さらに一九四八年にはソ連で、科学アカデミーからサン・シモンの選集が出版されている。

（注22） Lorenz von Stein; Geschichte der Sozialen Bebewung in Frankreich von 1789 bis auf unser Tage, Bd. II, 1921, S. 230.

（注23） Doctrine, pp. 187–188. Iggers, Translation, p. 92. 邦訳二三三頁。

（注24） Anton Menger; Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag, 1891, S. 68. 森戸訳「近世社会主義思想史」一一一頁。

（注25） 坂本慶一、前掲論文、四三頁。

（注26） K. Marx; ibid., Bd. III. S. 653. 長谷部訳八五三頁。

（注27） Georg G. Iggers; The Cult of Authority, p. 5.

書評

スティヴン・リチャーズ・グローバード著

『イギリス労働党とロシア革命
——一九一七年—一九二四年——』

(Stephen Richards Graubard; British Labour and the Russian Revolution, 1917-1924, 1956.)

このモノグラフは、ハーヴァード歴史研究叢書（Harvard Historical Monograph）の一冊として出版されたものである。この叢書のなかには、エリザベス・アイゼンスタインの「最初の職業的革命家、フィリッポ・ミッシェル・ブォナロッティ——伝記的評論——」をはじめ、多くのすぐれた研究がふくまれており、アメリカの若い研究者の意欲的な労作から成っている点で注目に価する。

本書は、イギリス労働党がその草創期において直面した諸問題のうち、その性格に決定的な影響をあたえるに至ったロシア革命について、その労働党との関係を、政治史的な視野から追求した労作である。本書の全体的な評価や批判に入るに先立ち、その概要についてふれておこう。つぎのような内容から成っている。序論、一、労働党—歴史的な素描、二、労働党と三月革命、三、労働党と一一月革命、四、労働党は干渉に反対する、五、労働党は干渉中止のために行動する、六、イギリス共産党の起源、七、労働党と共産主義者との初期の関係、八、共産主義者と「暗い金曜日」、九、インターナショナル、一〇、労働党、ロシアを訪問、一一、新しいロシアの危機、一二、共産主義者と労働党とのその後の競合関係、一三、政権の座についた労働党と政権を失える労働党、一四、結語。

著者は序文でつぎのようにのべている。「ロシア革命の歴史家は、一九二〇年代および三〇年代においてそれについて書くとき、彼らの主題を非常に狭く限定しようと考えた。彼らは、その事件を、つまりロシア革命をロシアの国土、その大衆だけに関係あるものとしてみたのである……」。このように、従来の、ロシア革命の西欧的な把握の仕方に強い不満を示しつつ、著者は、ロシア革命をそれ自体として研究することの重要性を指摘しながらも、ヨーロッパ社会政治史のなかでの評価という点を力説し、とくに一九一七年から一九二四年までの間におけるイギリス労働党のボリシェヴィキとの関係および英国共産党の創立にともなっておこったその労働党への加入問題などを論ずることによって、労働党のイデオロギーとしての漸進主義とボルシェヴィズムとの根本的な差異を明らかにしようと努力している。

本書については、すでに「サイエンス・アンド・ソサイエティ」誌に、ロンドン大学の講師でわが国にも広く知られているホブスバウム氏が書評を書いている。[2] 彼の論評は、なかなか示唆に富むと同時に手厳しいものがあるが、これについてはのちにふれるとし